



冬乃日海記
坤



冬好目注解坤

浪花 黄華庵升六著



あしは津よりあしは焼家と
すきまのり

出たあまのものをいつあつてまゝに
重五

万葉集三巻は人昔火焼家考酢四餅方已我妻古方常
弥記 人磨 此方を初書として出たりと針ののり
昔火焼家の手付けとつあひまゝにすきまやして床
つゝまゝにすきまのりゆくはうすゝたひいゝのり
まゝに書いたるはまゝにすきまのりゆくはうすゝたひいゝのり

目号
品番

むのちさしめりうらまきしまあしめりてけちふさふさの道く
 りやいまうしねとよなりて治定さうれ白法と古今集三巻の
 花乃やうのちあふし梅のまじりてしそんねあわいりうら
 費えけちちも陽うしやううらねとよなりて治定さうれ
 やいけいと不らむさふさふさの道くねさふさの梅やの
 けうのちあふしあふしあふしあふしあふしあふしあふし
 解りさふさあふしあふしあふしあふしあふしあふしあふし
 こめうらあふしあふしあふしあふしあふしあふしあふし
 とらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 りふ一むらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 くのちあふしあふしあふしあふしあふしあふしあふしあふし
 一白の美あふしあふしあふしあふしあふしあふしあふしあふし

竹の味も風流もさくさくのさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 清々も白くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 しきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 去るさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

ひまの粧ひを 鏡 磨 寒 荷 兮

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 白くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 馬うさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

趣向をめぐり————中居りりり——讀唐の拍子おと
し——ろりれ

意 蘇馬 骨のやわらび 笑うるやう 杜國

けりま三十二に手書をたて————をぶかに初らの作りこ
まゝふまうへ——先初乃五文字の花袋と夏子のもの
をばらりすくまぢぬりもまじく白をぬ————る骨の
をたて曲るしをまじりて骨三百の中よりまじりて
平白のやわらびやわらびの骨の作りこまじりて骨の
る——ぬる骨のやわらびの作りこまじりて骨の
くまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の

をまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の
骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の作りこまじりて骨の

詩經 七月在野 八月在宇 九月在戸 十月入我 杜下美

まりたを懸牌も等しきまて定くはとて初秋の夜白
 りうりこしをを陣とすり叶の懸牌の夜よまてしひあはとも
 に少く軽きりゆへに才之体はよ白もあつらふりあつらふ
 る一けし味いそ一しぬ人を定りてあつらふてあつらふの歌を
 すくくをサ五ヶ條曰才之のまりよ文章の定りてあつらふは
 一白のよあつらふのやうなれども下のまてしぬあつらふてあつら
 る入るれんきうたをけし味をまてしぬあつらふのまての字もあつら
 まてしぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 るも撰出れぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 留まりて一 才之の平白とあつらふて曲節のうらりあつら
 るも一作あつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 るの定りてあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら

アツラフの歌

おくろを田あつらふりてまてしぬあつらふて 宗因

まてしぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら 仙順

けし味いそ一しぬ人を定りてあつらふてあつらふの歌を 芭蕉

まてしぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 たく作の叶の才之をまてしぬあつらふのまての字もあつら
 のまてしぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 平白のまてしぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 後唐の作の才之をまてしぬあつらふのまての字もあつら
 る花と白りてあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら
 を女ろ浦の才之をまてしぬあつらふのまての字もあつら
 竹をまてしぬあつらふのまてしぬあつらふのまての字もあつら

やえ侍りて銀さうのうつろねもさきと見まふ功者の仕業
あるくー

鶴入るるおの月けらすうあふ 野水

きききうつろりしては夜を窓すのけ垣とも見ふし
しうしそんたあふる骨のちねと云冷まーき体を仙境
ともさゆいよをて鶴入るるよ作りしん函る林和鶴の侍
をほのめつさるるくー

風吹ぬ村乃日瓶入り酒ちりあ日 芭蕉

はるのよとねの鶴入るるよ作りしん函る林和鶴の侍
をほのめつさるるくー
の酒をまきよ作りしん月とらあみ秋乃りと附るる日並
のりりしーて鶴とさきゆく初らの感のりもあるんは

と丁寧小きくー侍る白まのう風淋しねくは家の取七
秋のいとありねさるん瓶子酒さくあくし忙れちり侍り
あるるりあるくーさる小人のあいの酒されさ鶴のうつくし
百々本の老翁ともろのあをちりしとんきさる侍者乃手
扱ちりくー

萩織るるゆえな市小振りし 羽笠

ちる酒さるるとさるり多るさあのみまをさひよをて彼兼
好うた能おさる小道織く世さるるよ作りしんあ
好くおさるるせ合さるゆえお作りしんねさひとー夫を
賣きさるる附るる萩織るる花のゆえ市小あさるるよハ
市所小遊園ちりしさあを扱ししさるるよ作りしん
萩ハ小遊園を扱せんらるる扱しし附るる越向を扱し

て季のあつたふりての候へ季のあつたつきとる初め
しつかりしつれ去とも尚季よりあつる白もあつた向
よりあつてもあつた一候ふの云々一猿蓑集は白の
あつたつたねの月を八柱向よりあつたつる白あり同
す天のちの月の新ちけはる尚季よりあつたつる
尚季よりあつたつる白の白り文書をあつたつる一風
と使ひしつれ足知り一風使はる白も振りを付るつる
白も振りを付るつる去来抄はあつたつる白も振り中
り白を白もあつたつる白も振りを付るつる白も振り
振りを付るつる見振の文書のつるつるつるつるつる
論語 子曰言以達志文以達言不言誰知其志言斯
無文遠不行矣

このこと

賀茂川や胡麻千代糸の微を 荷兮

ちの白の白を市に振る瀬川ありつる糸よりあつたつる
つる糸よりあつたつる糸よりあつたつる糸よりあつた
の白の白を市に振る瀬川ありつる糸よりあつたつる
糸よりあつたつる糸よりあつたつる糸よりあつたつる
つる糸よりあつたつる糸よりあつたつる糸よりあつた
と糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
つる糸よりあつたつる糸よりあつたつる糸よりあつた
を胡麻千代糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の
七糸被りあつた

いんくの糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸 重五

は附をとおしつらしそふ小智年の事ありとくは例の子眼一徒
あし木うしつらなふあふあきき智年の事ぬこと好し
附るるこころをふいおふまうしそふしに智年或は嫁に介の
一門我もくしつらしむあつて娘りしき小家あつて智年ハ何
ゆふあぬてそ智年あつしきしつらしつらあふの娘ハ
しつらしつらさつらなさつらあつて娘のつらひきもあつて
しつらしつらしつらしつらあつて加茂川の對する人

あつて布搦あつあつしつらしつら 野水

あつて智年あつしつらしつらあつて附あつてあつて
りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

て人あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて 杜國

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて 羽笠

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

の中りもかついそまきし武家意の多くし志も人氣の荒
きよき一あれはそ場をらん定てらん句さの周うらあし
ふるそ時ふちりて一 旁下りては月のくまふりあふ
アゆりて落せつきく血刀限すあけこの執をせん

冬より納豆とくちりし 野水

冬に意の附りて吹くこの気色をまをとり納豆と
作りて秋季の纏う待の一字よ持をるあそくろしそら
当季より素しそら句をれは句小振を附る故人の句作
を述べし

花ははく梅の徴とすくはる 芭蕉

花ははくの納豆とくそ人の位を定めし附るは梅の徴
と接するはとる去の句ゆりて春季にうまれをて扱は句

ふむらうしく解し先梅の徴とすくはる梅の字

韻會曰 黴支韻敗切 黴也 カハヒ 説文物中久雨

而青黒也 去はくは梅の徴と敗切は梅の字

一 貌げはるくしそをそくしそを解せんとするは次の句

の傍にのいりて款冬をのむトソは句より照し合せては

月ひそを子執するは是刻五欲六花の境をまわら

さるのうしはくし業障の嫌るくしと悟りてそは

の花を欲を捨てそをのむは人のまをわらふん 雨の

花はんとあはる人乃すあるのそをちりて梅の外は

されは芳しそ小着しと地とちりて人もあはるは

注し梅地のあしそちれは利のそは小深なる俗被官袴の
垢をきこちりて梅の徴と接するは句作するのさるし

或人の一語一徹と納豆のうろろろ一氏謂り亦蒙求
淮南子曰墨子見練絲而泣之為其可以黃可以墨矣
其書子うほくともろい不謂志ろくき線の昔よ葉小漆るうた
今もそのく様の葉色もま千らん垢を拵し様の徹よ
中されらん

傍ことのいそい欵多故吞 羽笠

左の茶臼の様徹と拵よりトリカをす味つてろろ花小泣
い於業障の癖の様の徹と拵るトハ愚忠を弃るそろい
入る人ちろく一とて傍ハ附るろろのいそいハ志ろろの
行可くし山吹を口ろ一の孫語ある一古今俳諧乃部ニ
山吹の心をろろめろろやれ問ともろくは口たりし
扱えを吞ムト作るろろハ山吹の癖を或は下ろろくし

或人の解小山吹ともい茶鉢ともろろ茶鉢ともろろ
のちとろろ小細ちれとも季をともろろそん末ろろ
呑ともろろつまろろ食類の辨ありさハ越小納をとも
とちれと陳て曰臼の表小山吹を吞ムトろろ山吹と
食類ろろ付尤山吹の下やろろれの水をや飲ともろ
白ちろく一ともろ白乃表をろし論する付ハやまきろ
い食類の通る一とちろ一ちろ一蕉門ろろの能治るろろ
食類あり付ハ是非を絶ちろろろろやろろ又ま
一語小律制小湯水茶の類ろろ食類よりまきれハそん終ろ
とも解とろれとも律の法をとも能治の替合を標とい
ろろんをたろく律儀小湯水の類食類ろろろろ
能治小飲食ありろ二白ちをまろろろろろを治る

陸一こちあしん今予の解のこちあしん山吹の巻を
吞とらふことある一ちあし飲合の類あるすれにそはる
へうんあしん只あしん人のまもはせてあへき

燕 水一羽を洗ひ 荷子

まもあしんの類を吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を
吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある
一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を
吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある
一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を
吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある
一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を
吞とらふことある一ちあしん山吹の巻を吞とらふことある

をりしん燕よ作りしん一山吹小針して黄白の色を
あしんも濁しぬあしんを言の傍乃はしんあしん法のしんり
る一

宜者か一ちあしん 釵を挿すれ 重五

けりしん燕の一名は天女と云ふは白燕と云ふは女生すりと
りしんあしんもあしんは燕と云ふは女と云ふはあしんかして
あしんかして釵を挿すと云ふは宣方の下りしんあしんかして
あしんは本草時珍曰人見白燕主生貴女故燕名天女
矣亦の一説は白燕は和名小鳥と云ふはあしんの中しんあしん
あしんあしんの玄宗皇帝の宣方小楊貴妃の釵を挿すと云ふ
一説あり亦或人の解しん燕は釵の挿れしんあしんあしんあしん
釵と云ふ一説ありあしんあしんあしんあしんあしんあしんあしん

定方かーこくーして下小君常のちりんまよのをまをてはかりー
くしんまよのしりぬ銀と唐子作りしる例のちの好とりかー

八十年をこりんアなる吉野母とらて 野水

け白先八十年をこりんアなるトりに二百四十年少きとこを二百四
才吉野母ちりんとんてをまあつーく解ーくささるすこさるか
そ小治家の役區あり一説小曰上の八十字執事の際りこ八の
字を除くべかり十まをこりんアなるしりて三十の男ことと解ま
すれと冬のり北太なるお翁の校舎のなうかいうよさせるお違
のちるまや八の一字を除くーとん後まさるる解をりくー
亦一説曰さらくそまのくをりあつりくく八十まの將くん
りりー八を岸八を垣八十氏の類くして人丸のまをり
まのこ八の八十氏川ろ細代木りりりりり月のように人ますす

ちりから八十年く一叔のまをりも八十まをこりんアなるわらひ只吉
の人こととのこりんアなり一説あり亦一説曰八十年をこりん
こ七十この男ことと七十年をこりんア七十一もちり八十年のこりん
一つりりり七十年まをかりん八十の叔のりちま三年入るるま
ま八十年 一こりんアなるりちをまは八十まをこりんアなる
かーくりの好小作りしるまよのこりんアなる風油くとりり
まよのこりんアなるりれ好むゆわけあして取きと予り牙
この後小なる換すりりー句解 吉野銀を結ぶとらるる定方ち
しりりりりりりりり九西施りもちりりりりりりりりりりりりりり
さやるるりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
ままのをりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
まををりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

母も持りとりぬれは長命孫の家を殊更小目出さし
おちりし銀の宝方下りし長活小阿やうんとうるく
るをりしきは附さるるのちるく
銀のや 秦穆公以象
牙為之敬王以玳瑁為之始皇金銀作鳳頭以玳瑁為脚璠
曰鳳釵

ふうくちんちん七夕のけさ 社國

夏もあつひの八十まを三つふつちんを二百四十才のまをいんて扱はる
凡人いんちんちんし仙人ともいんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
白目小阿やうんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
いんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
と秋季を附さるる寓さるるのちるくしんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
はの風潮ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ア〜〜ま〜〜のい〜〜ま〜〜書定りもあ〜〜し〜〜を七夕のけ仲人〜〜書
迎へ〜〜し〜〜し〜〜りけさ解始の祝の〜〜ち〜〜い〜〜意〜〜し〜〜後〜〜の祝
を用ひ〜〜い〜〜意〜〜さる〜〜し〜〜あ〜〜は〜〜ら〜〜い〜〜あ〜〜も〜〜ち〜〜れ〜〜ら〜〜さ〜〜さ〜〜を〜〜取〜〜へ〜〜

西す南す桂のちるく乃つちるくゆき 羽笠

ちるく小七夕〜〜秋のあ〜〜ら〜〜桂の〜〜い〜〜し〜〜し〜〜月を〜〜と〜〜せ〜〜り〜〜西
南〜〜し〜〜は〜〜む〜〜し〜〜七りの月ちるくちるく〜〜し〜〜七りの月〜〜い〜〜亥の八刻
あすもよろこ

茶葉乃ちあつた〜〜ト木うりさ 芭蕉

ちるく今秋のけさ茶葉油葉膏ト茶葉の油〜〜ちるく陳蔵
器曰蘭草生澤畔婦人和油澤頭故云蘭澤是は茶
の〜〜し〜〜白〜〜い〜〜秋のあ〜〜ら〜〜ちるくちるくちるくちるくちるくちるくちるくちるく
市人の油〜〜り〜〜さ〜〜体〜〜り〜〜桂乃花のつちるくちるくちるくちるくちるくちるくちるく

まゝト拍子をわけて附くるあゝんを

焼く乃ちあの子は賢なる女んをくろくは 重五

けりい茶の油とらやん女のあはれあるん——まを賢なるト
作らるらん茶乃香のくろくあゝん 秋風辞 蘭有秀兮菊
有芳懷佳人兮不能忘矣かゝるふをももや合せて賢女とは
附くるト——附くるらやん茶の油を絞る家のまゆきあゝんを
あゝり此のあゝんは賢なる女ありとて賢も多々焼く討多ん

拍瓶小栗をちりりりのくは 荷兮

えあひ多々の用を附く栗はあゝき桶さくろく拍瓶よハ
作らるらん前向の賢女うま業あゝんし

まやうあゝん梅子うまは正月了 杜國

けりあゝんし——まゝものを能く出して附くる釜を桶あはれふ

へきを拍瓶小ちりりトを悪物の取らるるをり正月あゝん
し——まゝものを能く出して附くる釜を桶さくろく拍瓶よハ
に梅子ト作らるらん前向の賢女うま業あゝんし
梅子の子とて話孫りくは拍瓶の麻痺のちりり正月を
仕あゝんし——拍瓶あゝんし——拍瓶あゝんし正月を
鄙とも小ちりりあゝんし——まゝ正月あゝんし拍瓶をよそとちりり
手をねたちりり拍瓶を除くこし正月のまやうし——まゝあゝんし

はらみ手向るあゝんま 官 野水

あゝんまやう正月の朝鄙ともあゝんまやうあゝんまやうあゝんま
多くい田今あゝんまやう正月あゝんまやうあゝんまやうあゝんま
あゝんまの官トハ拍らるらんあゝんまの官トハ拍らるらんあゝんま

一すつ水やも洋よせ心を志くは後考を付のも亦説
包と手向のとり解ありきん仮名少し書ふれいあり
此解杜撰と説き向ふは疫癘の除厄のくちの正月を土
直して祝ふちの神をすししはま家神樂やりの
を云ふなり

寅の日名且を綴治乃急起く 芭蕉

け付故翁の事さぞ知く一試ふ一性解を本いたの綴治
台命を蒙りし名なる叙を歩へしとるんま叙を起す
よ私のちうく小及いさから勇者の存しつる小叙治を扱
て名叙成就を祈るもや付しんを宮の一字の叙起ま
風をさちあり

雪かろくき南京乃北 羽笠

け白の綴治とらふより呉の干将をさひきてす南京の地と付
ちうんす南京りと呉地ちありとせうりしきしりて
楚威王の北小玉氣ありをり金を埋て以て是を鎮也
すりゆへは金を金陵と号きりり刻今の南京とせうりゆへは
とて一白乃文りてやうりて作ふちのるる

秦始皇以金陵有都邑之氣改曰秣陵矣

いこうさし誰ともさぬ人の像 荷兮

左いさぬちりつをさしとてんて付りす南都ハ仙法真隣の
地りしすきしりりふりて仙閣ありとありて故翁と
弟小乃ちや太少い少いゆりさ仙法おしすさりり
とて是をさるるふさやる旧都ちありりりも亦あり
正しちちの誰ともさぬ人の像の極ゆるりて

はらをひくるは僅ふ十歩

つみりて月とりをばりしれなる 杜國

けりゆくしゆくし定ちるさの影より名いよせしきりいぢ
書ふちゆく有り例ヤいちり付のん安きよき一のをもよ越人
うよよ故家筆を加く別僧と歌を設けあつるあし難系
あやしの光りをもくけりしけりし前まの大切のものこん
あつるきりふしよきい僅ふ十歩のふりよもくくく
よの念月おきりる者方静夏の浮世の力するくれしと
きんあししる大い感あり

氷あつりしありのいふはきり 重五

庭のあつちと乾ぬふ夕まのやきけききく出る月うすれ

しあつちとくししれのいまと乾ぬぬるの氷のしよちとくし
月・乾のしつるまをを静書よ比喩して布白の餘えをく
けり後と静書よを考静夏のあめと涅槃經曰是身無常念
念不佳猶如電光矣きくを底ゆり修くゆるきりし不謂
刹那生滅もは僅一歩のうらりし死あり何れ十歩の間と
や静よ静氷を踏りしとくし

昔函乃ホの糸糸を初初人乃矢山負て 野水

はふ季うりりしとゆくと詩格よ静の場ちから大よ意化
ちしてを考き初あのををきりしと故下し初人と付る
ま傷りりし初人を氷もゆり静書よ照しる時感懐
あつち初人とい布人の初齋を祝するまししと猶ゆの初初
をくしふきし昔乃ホの糸糸を初齋ゆりしけひと世の門出

ちねふとのあやと画さつめー

心の清門を押し明乃 屯目 芭蕉

さる白歯乃ホのそふをさうらうはー 粧ひ飾らさるるわう眼を
つけし清門よ初春の音と付さう例をば 粧赤の巻とさう
のちしめしは元氣よくさうり 林示さるく首をさるくさうく先初春
乃ねもの成さるくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
代の例の長後乃節乃後さるく我君のさるく心の清門よわと
極陰乃さうく卑妙の老乃通入すさき門さるさるさうさうさう
心空閑くの括りさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさう

ころ糞うく扇ー 風の赤ささうみ 荷兮

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
表の括りさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
白の化粧さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

茶の湯者おー ちねふの乃たんや 正平

掃除とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
かさか不浄乃條さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

らうたけ乃物さうさうさうさう 重五

けさうさうさうのさう人儒者の始を護らさうさうさうさうさう
体をけさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

りふさあをくらふに勞こころを勞するはなほなほ物よふ
原くまうらう女をく——原氏よりうけまうらうの
りうちはねをまうらうあふらうのこかしく傳のま
りこころうらうのまうらう——又原氏にぬるの入りうらう
へらうらうのまうらうのこころうらうのまうらうのまうらう
らうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
はまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
連うらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう

燈籠ふらうらうのまうらうのまうらうのまうらう 杜國

まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう

まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう

まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう 芭蕉

まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう
まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう

まうらうのまうらうのまうらうのまうらうのまうらう 野水

是花の場を附けり花のすぢりあつては吹散れらるやうすぢり
そのは月入もさうさく秋風烈しく吹散らるるもさうすぢり
若草のほろろんとさう水を彩若草花はトあつてさう作り
さういふをさうさう

新月お双六抄の縁三條—— 杜國

お白さうさうさうさうさうの風流さうを双六抄とさうさう
附けりおまゝさうさうさうの坊小ゆりさうさうさう信樂の二字
双六のおまゝを白りせさうさう

お花買さうさうさうさうさうさうさう 荷兮

新月おさうさうお花買とけさを附けり季をさうさうさう
花の本草綱目所種二月至五月開花晨乗露采花とら
ねらお白の双六抄お原小名をさうさうさうさうさうさうと雅

お作さうさう新月おさうさうをさうさう買さうさうと作さうさう
合をさうさうさう

おのさうさうわさうさうさう 野水

紅花買さうさうさうさうさうをさうさうさうさうさうさう
さうさうさう商人おとけさうさう子服一統の場おさうさうさう
さうさう作者の傷け附けさうさうさうさうさうさうさうさう
浪人の住居とけけ穢人のゆりあささうさうさうさうさうさう
さうの業をえさうさうさう紅花小籠のさうさう手扱あり

命婦の君さうさう米さうさうとさう 重五

おのさうの業のたさうさうさうさうおん小籠を作さうさうさうさう
さうさうさうを附けり浪人さうさうさうさうさうさうさうさう
とけけけけけけの業さうさうさうさうさうさうさうさうさう

聞きしうらたはる磯ちかひりもよき業ありあふきを
のりとして次を附るらん乃扱ひ（？）おとろりー蕉門はんの扱ひ中一
りしうたふ季詞ありしとてその白を能く足元せしそ季詞子警
りぞ雑るるもの雑と一亦季序なく或は性うる季詞うともを
白の扱きなるのつら季の取れなるよのりうくそ季をんあー
て口をきと附るう蕉門の傷さこ化門のそ季詞あうつとて扱ひ
あかろうらひ其季を附るあうくー蕉門の志くは意とて
亦そ小同ー

海くさまろく津浪の水少くわゆ 荷兮

まの津浪一郷一郡のまをるまを附くまの米を禁裏
らう乃降扱ひ米と扱ひしとて

佛喰あつる魚あつるね まり 芭蕉

津浪の大きふ大魚の岡あつるうらと附く仏喰あつるふ一
白の扱向あつるん昔ー江戸絞井の仏大魚乃後中より出
現せうとて亦濑州も魚の扱中より取れあひー恵ん
の作仏ありしとてん昔ーも今もうらる例ーいまうらー

縣ゆつたるあふんはるゆと作れり 重五

け付いうる大魚を解くを浦辺の昔者あうくーとて是ん
はるゆつたる昔者あふんはるゆと作れりゆと作れりゆと作れり
花んを借して年くまたりはるゆと作れりゆと作れりゆと作れり
いそはるゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れり
花んはるゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れり
日向國も是んはるゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れり
はるゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れりゆと作れり

五形 堇乃 畠 六 及 杜國

左少い華重の姿をとりけりさ白のひそ月小花子梅
ひくくせる 語客の昔過せしよりさしとこの甲人さる
伴う九浦山ヨリ一七者あはれも巳う業花亦多くの田畠を
も喜たさるし今い漸く五つりも形りさるんまさるん
く五形すこれのこゝと世を視しん

ウ水 くに 嘯 雲 存 ちり しく 芭蕉

五形堇の咲抄お那うくの暖きるま色を附けり

まの 屋 之 三 竹 ね 少 ころ 月 野水

休まらぬまのりのうらうらうらふもや午よひの光を
あつらへ眠るを

おう くら ね 也 矢 刻 の 橋 乃 ち ち 野 杜 國

東海を思ひの橋は扶桑才一のそ橋ゆく長計百八ると
く歌詠のそのねかりゆくを橋乃昔きとけしらあつら付り
矢作の甲の日本武尊東征時作矢奉之^{ハヤ}きりしと下名
呼作やと

庄 屋 の ね を くら み 送 り ね 荷 兮

さるのや外よりあ手亦昔を眠くして左少い下季のねろと
んく附りしそ変化ありしころ白きものりりか
了年加えり或は嫁礼杯の祝ひるありてねまきりよ代の
昔さをねろしと送りしとありん

捨 子 と 柴 前 け 小 の ち ん 野 水

くお起情の付と他のこもあはれよと送りしねろねろよ
アとあつら子ののめをさしあはれりし白きおのねろ

うし時遅くかりそめをきくもみせり子ひりて
アタリ人の傍アめいそしきめはきくも持ふりさる今
相多しとらつる一本の松乃りてありしを稚きものや
今の松す出りてありつゝんと此のあし世をいそめは
けし頻りよわりのあつてくまをうて成人ありぬき
柴前も少と延つてんそきいせまいたくたわのめ
しと年七十二才あつんをわけの作は文書こけいといひ
子の垣てふ松ふありんりるとりわちよりそいひをみん亦
小町物よりめ五世のち松少なりと持家のおつたのしり乃
松多きしき此を松と名づけし小町を持てりとりけの松と云
一字は解小使ありそしそを思ふ合せしんそきこ

三十りをとさたりく刀 寛文年 重五

けい人の親の子を名あつりてあつて子孫つり子を推しりり
凡十二三年も松ありし松今いそ子の我手よりりてかき
しく育てしんあは刀をも持てしきを樂し
多しき中の心をもちきめ松をこ松の便りともあつて
牙のしりく小松ひゆさあひりめし棄てしゆはてき代
乃刀さく賣拂つてあり命を惜ふく海少なりきき乃
しゆゆしりす松ともそいせりてうち松く子かあや
あし二十りそく十八大とりの松あつんしりの子を松の
としそもせし算あつりしとれとひしと松は元りそ
しゆは松は松なり

雪乃狂異の國おらまめつりし 荷兮
是は東坡杯の侍ゆしそ松白のさる松は松は松をま

て書のりしよの宿書と附りて異國乃詩ね人雪の真小糸
しつてけいふまきやらん多しきい風人の雪よりあまの秘
花の力を洒小代て答書をも信友の交り遊遊の体ま面ふ
詩よ黄金不多交不深ともりれいさふ朋友の信
あまき人間の存情をも滅めりて

襟より雪の狂人と附し句をたしあはれし花女乃片袖
を襟あまら被さつておうしあまらしむねむあはれかきこ
ふも己まきみひしき曲のちりて異国の雪をうらまえて風ね
をそよひやらん物あまらし異國乃雪下ハ言ひあはれ
笑東坡の藝あまらししと風俗乃異体をうらまえて

あまらしと花を棺に香をささん 重五
あまらし花の片袖を襟とすんたりれのおうしあはれ揚屋乃大
騒きと附りて句をたしあはれ花の行あまらしとあまらし香をささん
花あまらし死のまき棺とありし二世も三世もあまらし
と附しあまらし花ありしとあまらし劉伯倫をあまらし酒を
あまらし劉伯倫性嗜酒嘗攜一壺酒使以荷鍾謂曰
死便埋我

芥子のひもくろり名をこらひ禪 杜國

あまらし釈教を附し一壺しあまらし花を棺にせん
りてあまらし花のひもくろり死をまきしとあまらし
畏きさる氣あまらし花を棺にせん
一休禪師杯の侍を附し

陽つるとわれいところも嵯峨たつりのみ勢ある地小庵をト
てころち替りてけひすなりて居る体をおよりやめるまよこ
声とさよハちまうら小節さうせのちるましもあくとちれくと唱
へ居る後世者のまかひと殊勝

うけうすきり燈けし起住と 野水

まよちまよのま仙をゆるる人を附けり新を陽とけりう田家
乃住位をおりやちせしあころ細きまようけりいあせりう
すまよとまよしねしつてまよとてけり燈の火のちうくんとまよか
まよしとま仙のまよの函にまよあまの淋しまよもまよけり起住
よるまよんうけり

まよひのけりも夜のきり 重五

まよひの燈消しつてけりちをまよせりてまよを附けりうまよれ

まよひ初りてまよのけりてまよひ密くまよひりやせんともあけり
まよちまよひいとおけりけり燈消しし起りてまよまよまよ
くよけりまよちまよひつてまよちまよれ

まよれ飛たけりまよの花のうまよ入 荷今

まよひの初をまよちまよをけりてまよちまよを附けりまよひ
まよひくまよまよひつてまよの切まよまよまよまよまよまよ
まよちまよひ伊勢物まよまよまよちまよちまよのまよま
らんまよちまよひまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよ功者のまよまよ

まよのまよのけりまよまよまよ 芭蕉

ける西上人の辞世まよまよ二まよまよまよまよ西けりまよま
まよまよまよまよのまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

白き花の影にうらみなくさの影にうつる魂をみゆり
あつたに——となくくさぬひまにさかす上人のこころ 死すもの
とみ月の花の影 そねくりきとやきれたらん 凡俗の人か
さくらにはむり——となくくさあふり——

田家眺む

一 お月や影のはくくあひあへ 荷兮

はさむをくはのさるよりいひあせり影のさあつ毛をむ
く風よはくくお月のおあふり若りりさるこいこあひあ
こつよよ刈田の株つつくく——となくくさあ田の水乃鏡まつきこ
きくくと眼小應^{サキリ}さるもの淋——さるかみちあふりてお影の影

か——おけの賞するふいふさあうくひすやまの藤麻小をく
まんとおけおとさあうくううひさるさるもさる田家の眺む
まよはけりるを那のく——となくくさあ時のうりゆくおとせのま相
を即今ひと眼小アアアアア実小おとるき幻術あつらひし

冬の影りのあふりあふり 芭蕉

お月影のうらみなくさあひあせるとあふり白かおまねをらんせうさ
このまよはけおとさあうくをあふりくさるうらと作るとさるま味
余情のくさる不可説く——となくくさあを解する時お即ち中こ
まよはけあへまき左傳曰趙衰冬日之日也言可愛趙盾夏日
之日也言可畏云云くはあおの余情を失りて——となくくさあ
春りのまよはけさるよりあふりの苦熱をさるれ秋天のまきさ
しくとなくく影りのあふりくさるうらとさああさる風あひあはけ

的とる童 業切りし 野水

ける或人の説はまもさ其是く内内さたらあさるの言便り
まつりよ身も小体のんやれいなる板舟の海よりまつり
け解きまつりしんをいさる白の童林のけりまつりも表あけりま
をまつりしきもあさ日其是くつらひきまつりしきもあさるりて春平の序代
と附しるしんをいさるや作者を傷らふきこ法正万葉をいさる
海耐あさるしんを業切りしと特無をいさるやとまつりし

秋のくち様の内はまつりし 芭蕉

ま白馬宮の真の業切らふまつりしをいさる上層の旅とて附
らまつりし白馬宮の位のりまつりし人のくちと様のまつりし
のくちりまの序代まつりしまつりしまつりしまつりし茶をいさる切
無しまつりし体まつりし源氏をいさるのまつりしあさるし那とま

小房つらくまつりしぬありしけよつらりしとまつりし
ま合まつりし旅のあらまつりしまつりしまつりし料まつりし
備りまつりし秋のれとまつりしあつりしあつりし

漸くはれし 冢士 寺 荷兮

ま白馬の序代まつりしまつりしまつりしまつりし
ま双のまつりし附しる旅のまつりしまつりしまつりし

寂として 杖のまつりし 杜因

ま白馬の杖の附しるまつりし杖のまつりし杖のまつりし
まつりし杖のまつりし杖のまつりし杖のまつりし杖のまつりし
詩よ 高丘蘭若
一峰晴食隨鳴磬巢鳥下行踏空林落葉聲かゝる風系也
まつりし杖のまつりし杖のまつりし杖のまつりし杖のまつりし

さつさつらつ花穂の香をうけんきりーの人の神の香する花よ
その和らるる花より書録をうけんきりー山家集
挙白集の教のありあたる書名を出一つとありー
に私小名をとまきんする庸凡の人及びさるる一麻子の
名実よ妙くあつても花白よりして傷りあつていふよ故
まきんをさるるをまきん

江をそく 独楽菴と母を控く 重五

その集編とさるる遠くと西上人近くは喃子杯の付とてそ
人の字を付たりあつていふなり代意をの白とくー独楽庵よ
いさふさるる風人をまきんする麻刈とら書名のそく
独楽庵とらふも作者の物好しとまきんする寓言ある一の
集編あ人の世をえん破りて安くは生涯をくさるるをさるる

花よ庵とさるる体し俗言小ふ喰多る花杯つとくー赤山
崎宗鑑は海濱州新浦有明濱のわたり小住して大抵彼の
編を承りーさるるをまきんする人をは近くは風を
ほののさるる

五月月あよ月あつらるる 杜國

是なり此白りてさるるの作者い風家の花よ庵と付くはま
まふ又い風を付くはま化さるる好子世と控といつとて
仏者とい付くはま五月上八所謂まは法性の月りてまはあ
るる上八所具の煩惱罪業のまきんする一淫曲一五蔵六
欲の浪風とさるる一とらるる煩惱妄念のまきんする
之様統として法性乃月破れうまをうら勢さるる五月
出よと花あつらるるーまきの月上八法華玄義曰清淨真如

如雲外月ツラ云真ト不妄之義如不異之義也真故一切ノ妄想
ヲ離レ不異ノ故一切ノ我他彼此之差別ナシ也ト住トを
とるもトはトのトらトりトひトひトてトあトるト者トのト月

たむ衣ト由トりトるトをトうトらト拂トひ 羽笠

たむ衣トのト猶トるトとトふトをト守ト答トあトはトいトきトのト身トはト是トるトあトる
こは作者トはト手トくトとトをトゆトくトさトやトるト公トのト答トあトをト世トあトるトは
人トるトくトくトとトへトくト中ト納ト之ト初ト平ト或トはト実ト方ト初ト長ト振トのト付トを
ありトひトあトりト旅ト之ト旅トとト付トくトんトきト旅ト中ト小ト旅トをト抄ト拂トひ
とトくト旅ト中トのトうトさトをトとトくト旅トをト雲ト上ト小ト作トりトくトとト受トまトす
一ト句ト罪ト人トのト体ト小トきトやトくトくト作トくトさトるト不ト真トゆトくトとト

筆輿トゆトくトはト本ト瓜ト乃ト山トおトん 野水

たむ衣トのト核ト体トのトうトさトはトくトとトのトうトにト罪ト人トのトうトさトらトりトはト

えんトまトをト押ト出トくトてト附トりトきトはト筆ト輿トのト輿トふトくト本ト瓜トの
山ト合トはト嶮ト岨ト乃ト容トをトんトやトらトとトありトくトくト一ト句トさトいトんトをト守トりトきト
輿トのト困トひトつトるトくトもトさトきト終ト小トはト官ト人トもトんトをトゆトくト飛ト人トを
ゆトりトてト輿トとトりトあトるトくトくト体トこトとトくト筆ト輿トゆトくトはト作トらトる
るトくトはト中ト小トはト志トをト抄ト拂トひトくトはト付トりト拍トをトりト他ト志
用トらトるトくト

坐ト小ト泪トくトくトうトらトくトと 芭蕉

けりトもトりト他ト志ト在トりトてト泪トくトくトとトおトよトりトるト体トもトらトくトくトはト
おトのト筆ト輿トをト遠ト流トのト人トとト定トめてト附トらトくトくト一ト句トをトらトんトてト泪トくト
よトけト出トるト小トをト九ト迂トへトくトはト若トらトうトいトくト囚ト人トのトうトさトらトりトて
屍トをト荒ト磯ト小ト晒トれトきトもト又トくトのトうトくトあトんトとト抄ト終トさトるト体ト尤
史ト記ト賈ト誼ト傳ト漢ト孝ト文ト帝ト二ト年ト河ト南ト守ト吳ト公

身を教へんとぬれは捨ちてふに捨ちてふにけおつてふにけ
菩薩よ度のちりてく——行菩薩菩薩のちよちりてく
乃ちかきけり又くもてふ母くもてふおれおれおれおれおれ
父母のちりてく——維のちりてく——

浄幸ふく世むるのみくすり 重五

泥のくくの魚ちりてくうりてく一精して川 物の浄幸と併てく
白の泥とくおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
ちりてく——

あ〜んてくの年の小角豆花もろし 野水

あ〜ん水の浄幸とくうりてく早魁とくそ時候を併てくおれおれ
よ夏日長愁民とくおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
こまおれ幸とくおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

菅花ちりてく小炭団つく白 羽笠

あ〜ん菅花の併てくさけの花とくおれおれおれおれおれおれ
あ〜んおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
あ〜んおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
あ〜んおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

芥子尼の小坊あ〜んおれおれおれ 荷兮

あ〜ん伸——白く炭団はくあ〜んの小坊おれおれおれおれおれ
小わ〜んの遊むおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
小女を尼とくおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
あ〜ん

あ〜んおれおれおれおれおれおれ 蓮の葉 芭蕉

尼小坊とくおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

もの手あふれおそりて弄あさるるあり

志 月 飯 重

あふ草まきより寺に付たりとてくれけのさなを飯まきり
そくと作りしちありしなり詩よ深林人不知明月来相
照るをい出さるる寂寥の体よくつていへり

ちあをくまのひのねわりのた 杜國

まらうさふしつらあうり振舞うと付て月のまくとりあはれま
の体を風やうりしきとらうりなり一字一儂あり
んんん

約柿よ居根あうれしなれ片鹿 羽笠

ちあちく振とらうり山家の体を付たり約柿よ家根草
ふふふ家のまひしきふあうりつらうりをいへり

むろ肩はくろりく母の喪ふ入 野水

あは起性の付くあふの伴しき体を喪ふとて付たり
喪親者居倚廬賤者居聖室 宰我问三年之喪期已
久矣子曰夫君子之居喪食不甘聞樂不樂居所不
安三年之喪天下通喪也 右論語取意 山濤居母喪

負土成墳手植松柏

えん政のまより杖と破れを 芭蕉

あふ母の喪入りとてより孝人の人をんちてえ政と付
りたりえ政に塞乃母を居りてはまより甲州身地山
訪あてより孝人の人多けり喪ふあり居て悲歎のたは杖
と破れくるとてあをれをいへりまの句作く程まの一
字を味あう

伏見市情の流しを記す 荷子

は附まありしころしは伴のえ政り枝に後し破れ伏見
ちるこの花の鏡のこめふ抄るこのこめ討こまに二の表り
まゝる曲節らんくされを太小曲をりつまゝる附るる一

いそあつさ男猫ひとりつを控へて 杜國

なれ鏡をとりつとちる入相のさるをりくんとあしりとりあ
るし一白まのい家うらるる伏見本情乃民たよ猫を子ら女
系のたぐれ伴しきおしつ飼猫の夕アより留るるを抄
つあなぐ体し性ころさ男猫の本のるも家東し居るて
出らなくを誅あつされり小飼馴しは控へてあるとあ
るし一たぐれのさるうらちあつてり附こ

屯目のましつしの雪をうねるをりか 重五

猫控りのつら小猫をまする人を附りき人か多る婦女
類ひこまはらうまるとものまらうよまけさるるらう一
猫の性まを畏るくものまはれまのまるとし余まの体を
一向の熱向とあしりあつせんまの女このまおをもよを合
せりあつるまさうも

水干をまら白の腰わりやう 野水

け白のまのり一節をまるとんくまの白のけはを白らをたん
まはれまら白の腰とらまらう一まら砂とりあま水干と附て
まのり一この初雪のちりきまら白をねらうら一或人の
けまは白らうりしてまら白を照しんはれ相白の二字一白ら
うらしおらうもまら竹母を白らやまらまの腰とらまらして足
り一らうまら白の腰とららうらまらまらまらまらまら

とりあはせ御ちんや後人をも考へり

山は赤くも白くも雪のこころ—— 羽笠

けりも白くも雪のこころ—— 羽の雪の山を赤くも
を白くも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
白の雪も乃脱捨する雪も赤くも——

追加

いづれも人ごとくも牛をうりてま 羽笠

けりも白くも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——

抑して素ももるをうりてま けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——

けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ—— 荷笠

けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——
けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——

とくさ 川下もよも雪を茶せん 重五

けりも雪のこころ—— けりも雪のこころ——

解くくくくけりぬの松火もあつとらふを庭燎或は火焼杯
の神もとらふて神の松火の能くけりぬと本城前上猿樂の考
能くくくくくさけい下若小ぬみをちやせんて上作りてあり
けりてけりてありてありてあり

梅のまじり官をや川すねけやあ 杜國

まのまのの能のうりり古新なる体を能向とて松のまじり
るのうりり作りてありてありてありてありてありてあり
人くあまもろくもまの御宮をくくくくくくくくくくくく
はををちりすありてありてありてありてありてありてあり
ちちのまじりや川すねけやあ出之敷ひぬる

浪り蛤かりん 月まき 海芭蕉

けりハ文の供席とけりてありてありてありてありてありてあり

けりてありてありてありてありてありてありてありてあり
くやひちりありてありてありてありてありてありてあり
月ハ海とけりてありてありてありてありてありてありてあり
をまのれ系紙もつてありてありてありてありてありてあり

ひりり小橋をすけん 岐阜山 野水

くけりてありてありてありてありてありてありてありてあり
まのけり名も地名なありてありてありてありてありてあり

口記に述べては名実を自とせしむる如く

かゝれ家や人乃 浮くくくくくくくくくくく
斤口もは月よりくくくくくくくくくく
小甲花の角拾はくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

懶性従来水竹居

くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

蘭更 方廣 崇溪 瓦全 甫尺 月居 定雅 紫曉 白黛 鸞太

川秋や風れきも霧れ行かしく

未佛

よき葉持山松月日も中道行は

遠里よりいふは守守の心空あり

石葉

名もなき思ひきこしむやかき成余

土卯

秋の川ときき申けりまをまの風

嵐月

秋海しすまやうきまをまの風

墨古

首の如や目鏡乃らるるお和成

倭泉

いふはなれはかきまも志まを佛の在

謀價

おれはちふ二月の梅とあまを

金丸

死くもあういほや物多傳

金兔

良辰並月

まのまの唯秋なり花とかりはるま

文暢

すまれつすまきお隅よりりきり

杜人

風ありや切花の角およりかき

芥水

古きや赤れなれし花の庭

熊三

いふはすや松さしほまを小毎系

杜栗

風なりは柳ハくまをまの月

可董

まのまの山ハく初る車うり

江蓼

若葉はふちまをまのまのまの

鈍来

葉の冷やまをまのまのまのまの

車容

おまのまのまのまのまのまの

九溪

風しすまのまのまのまのまの

和交

かまのまのまのまのまのまの

藁子

桂郎

文あ母へ一禮まきしけき
啼すすゝ雛子の影も川端山が
中へもよこも何れもなかなり
さとしくや夢乃り寝櫓らりり
つゝもよこも小野の音もやまは
すゝもよこも月子ささるるも
うまもよこも中へにささるるも
馬下つゝもよこもけいりも
ささるるの音もよこも山端の
のゝもよこもささるるも
年忘まきと葉乃り介の巻ハ
ささるるもよこも未乃り春の月

春坡 畠南 春花 五牛 戸口 八重 古塘 杜桂 平和 双南 松苞 松蒼

つゝもよこもねの影もささるるも
いゝもよこもねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも

俚を 楓川 波声 朱駒 光曉

修山よりゆきもゆきも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも
ねの影もささるるも

南和 雲裡 良水 毛條 亀卜 梨山

河内山

寺田

田原

柳葉子世は志し梅はなほ
城の心もかたむけのちた浦山し
まくとるふ女こゝ移や文衣
まきりし裏衣ししきりの裾を
阿弥となしう移を依のあ松
ふ本もさししし庵のやしし情
区しししししししししししし
柳はとく性のもも流もさしし
姉らもさししししししししし
あはれもさしししししししし
結まのさしししししししし
舞りさししししししししし

其白
花曉
古律
斗流
魯長
自来
之今
花光
一節
曳尾
黒樹

来と忍きて柳何さししししし
お人さししししししししし
鈴もさししししししししし
古臺はさしししししししし
霧乃狸子飛ものさしししし
割りけさしししししししし

止雀
管鳥
九山
芋嗜
應美
文鳴

これ年の黒たさしし

かきまらしし牛た拾ひぬま春は令
月文と解さししししししし
何素の君のふさあさく
白鳥や妙なふしししししし
布らさししししししししし

都雀
呂蛤

桃李
松花

さきぬや嶽よりさきく紐子の色
名月やほとさきぬもさきぬ
系根の字月を下の何とさきぬ
海乃者おみかややんを
名月やさきぬは梓もさきぬ

月峰
志諺
斗雪
閑空
嘯山

てしつとさきぬまの山を入りぬ

拾律

二柳

啼きを在り移ぬさきぬはさきぬ
師を人信む乃橋のさきぬ
阿さきぬあやまぬはさきぬ
さきぬの何とぬれ乃何とぬれ
さきぬさきぬさきぬさきぬ

陀岳
青鯉
馬印
奇淵
旧國

今啼くとさきぬも似るさきぬのつ
鴨ハさきぬさきぬさきぬ
刈厨をさきぬさきぬさきぬ
すさきぬやさきぬさきぬさきぬ
山隣乃梅一輪をさきぬさきぬ
白山乃さきぬさきぬさきぬ
さきぬのさきぬさきぬさきぬ
何さきぬさきぬさきぬさきぬ
けさきぬさきぬさきぬさきぬ
阿さきぬさきぬさきぬさきぬ
さきぬ入乃さきぬさきぬさきぬ
さきぬさきぬさきぬさきぬ

池
伊丹
西宮

丁江
宗普
女之
柏庭
意水
竹外
東瓦
何文
蜂友
魯隱
支國
文嬌

傳〜ぬ日も雨の川梨の如きも
我多のまははるもまを牛やち田干
春のゆやそつ〜も〜も〜も〜も
植者〜し朝露た〜る〜る〜る
宮の紙も月乃さ〜色好は下
多我す〜る〜る〜る〜る〜る
月乃さ〜る〜る〜る〜る〜る
山寺やをさ〜も〜も〜も〜も
そ〜る〜る〜る〜る〜る〜る
ぬ〜る〜る〜る〜る〜る〜る
名月子一入志路〜し京の
う〜る〜る〜る〜る〜る〜る

文 莖
鯉 城
和 幸
施 岳
歌 和 井
二 毛
八 千 彦
仙 缸
其 碩
梅 司
田 毎
つ ち

蕉門俳諧書林

京三余通寺町西江入ル

菊舎太兵衛

